

隠れ家

高橋 久美子
(市川市在住)

昨年の冬、フィリピンのセブ島へ行った。会社から夫への、永年勤続のご褒美旅行である。のんびりしようと、隠れ家のような小さなホテルをふたりでえらんだ。

本を片手に、プールサイドでカクテルを頼んだり、地元のマーケットへ行ったり、海でシュノーケルをしたり……。繁華街にも行かず、ただただホテルの近場で楽しんでいた。けれど一箇所だけ、私が観光したい場所があった。セブ島の東にある、ボホール島である。ツアー4日目の早朝、セブ島から高速船でその島へ渡る。

いくつかの観光地をめぐり、遅い午後、私のめあての場所に着く。山中にある、ターシャの保護施設である。

ターシャとは、フィリピンメガネザルの別名。おとなでも体長は10～12cm、体重は100gほどの、世界最小級の霊長類である。原住民には「神の使い」と大事にされてはきたが、数が減少し、いくつかの保護施設ができたそうだ。

職員から「決して触らないで」、「カメラのフラッシュは厳禁」などの注意を受けた。大きなケージの中に、熱帯の植物がわさわさ生えている。ターシャはどこ？ と目をこらす私をどかして、職員がケージの横の扉を開け、入るようにうながした。動物園のように、柵越しにのぞきこむのではない。10畳くらいのケージのなかに人間たちが入り、高さ2Mくらいの木にいる、ちいさな猿を探すのだ。「いたよ!」。夫の声に振り向くと、彼の目の高さに1匹、少し見上げる場所にもう1匹がいた。想像以上に目がおおきく、からだは小さい。尻尾がねずみのように細く長い。臆病だから驚かせるな、という職員の注意を思い出すまでもなく、自然と小声になってしまう。目だけを動かし、じっとこちらを見つめている。ターシャの好物はコウモリ、トカゲや虫。職員から小枝の先に刺したこおろぎを貰った。そっと口元にもっていく。パッとこおろぎが消えた。ターシャがもぐもぐと噛む。と、また静止。虫を食べた、ということに驚いて、気持ちを落ち着かせているそうだ。本当に臆病

……。写真の何倍も可愛い動物だ。

旅行前、ガイドブックのターシャの写真を見て「気味悪い」と言っていた夫も、最後に寄った土産店で、ターシャのイラストのTシャツを探していた。帰路、バスの中でマイクを持った女性ガイドが、「ターシャはどうでしたか?」と尋ねてきた。乗客が「小さかった」、「可愛い」と口々に答える。興奮気味の私たちにガイドは保護の大切さを話し、ゆっくりと続けた。「ターシャは、自殺する猿なんですよ」。

ターシャの頭部はとてもやわらかく、人間が強く押せば、そのままぺこんとへこんでしまう。敵に襲われたり、何かのストレスがかかると、小猿は、その頭を石にぶつけたり、水たまりに顔をつけてしまうという……。

ターシャの減少の理由は、お決まりの開拓や森林伐採、密猟だけではなく。

「今のフィリピンの人たち、みんな忙しい。むかしは山の中、静かでした。でも今は、ターシャがいる場所にも、みんな平気で入り込んでしまう。そしてターシャ、死ぬのです」。

皮肉なことに、ターシャのその繊細さが、かれら自身の保護をより困難にしているのだ。そして、そんなターシャを見世物にしないと、「保護」ができないという矛盾に、私の胸は痛んだ。

10人ほどいた観光客は、みな黙り込んでしまった。隣席の夫は、Tシャツの入ったポリ袋に目を落としている。南国の夕暮れは遅いはずなのに、遠ざかる風景は、もう濃い緑の木々の中に沈んでいた……。

翌日はホテルのなかで、またゆったり過ごした。その夕方、ビールを買いに出た夫が走って戻ってきた。「あいつらがいる!」。チェックインをしていた到着客の中に、会社の若い男女ふたりがいたと言うのだ。男性は夫の部下。「あいつの有休の申請、帰省って書いてあったぞっ」。テラスに張り出した大きな木の陰に、なぜだか身を隠した夫がキョロキョロ探す。プールの向こう側の小道を、ポーターの後から手をつないだカップルが歩いて来た。女性のTシャツのラメがきらきら光る。「そうか、あいつら付き合ってたのか!」。夫が、まだぶつぶつ言っている。——“隠れ家”を選ぶのは、どうやら疲れた中年カップルだけではないようだ。

ターシャの隠れ家も、いつの日か戻ってきますように。